

急こう配の山林  
で物資を輸送



# 山間部でドローン活用

## SRS Connect

### 獣害対策資材を輸送

期間中は、1日当たり約50点、1個当たり10〜30グラムの荷物をドローンで輸送。天候不順や途中で撒く日もあったものの、合計800回以上の飛行を行った。バイオマスパワートクノロジーによると、林業でこの規模のドローン輸送実験は全国的にも珍しいという。

バイオマスパワートクノロジーは、バイオマス燃料による発電事業や森林の再生事業を手掛けている。今回のドローン輸送は、新たなドローン輸送は、新エネルギー・産業技術総合開発機構（EDO）、斎藤 効率化、省力化に向けて保理専長）の支援事業としてドローンの活用が提案さ

て採択された。紀伊半島エリア各所でのセンチン・ヤナキ類・ナラ類・カン類等の青虫（植林・樹出実証）の一環。

紀伊半島の山々では、鹿などの野生動物が植木を食す「獣害」が輸出し、植林が難しくなっている。獣害対策としてネット、支柱などの資材が欠かせないが、急こう配の山林では車両で輸送するのは難しい。このため、人力で運ぶ、あるいは増車を利用するといった負担の大きな作業にエネルギー・産業技術総合開発機構（EDO）、斎藤 効率化、省力化に向けて保理専長）の支援事業としてドローンの活用が提案さ

SRS Connect 野田有美社長、大阪府中央区）は9月10日、バイオマスパワートクノロジー（北角強社長兼CEO・豊高経営開発者、三重松阪市）、玉木材（同社長、奈良県五條市）に協力し、獣害対策資材のドローン小型無人機輸送の実証実験を行った。5都市の山間部で実施し、輸送にかかった時間や機体の安定性、離着陸時の安全性といったデータを収集した。（黒岩寛）

れ、ドローンを専門に扱う「あつたもの」、玉木材のメンバーから「荷物を背負う協力することになった。今回、同社バイオマスパワーテクノロジーのほか、あつた、今後は、バイオマスパワーテクノロジーが周辺エリアの山林を管理する玉木材のメンバーが集まり協力して作業を行った。ドローンの翼から強い風が吹くため離着陸時、砂が舞ってしまうなどの課題がも貴重な経験となった。今回は林業従事者の省力化がテーマだったが、ほかにも様々な活用方法が考えられる。屋外であれば、同じ敷地内で物資を運ぶこともできる。効率化につながるはずだ。緊急事態の際には、ドローンでの輸送が期待されている。どのような状況にも対応できるよう、今後とも開いていきたいと話した。

野田社長は「ドローンの活用に向けて、当社として開いていきたいと話した。」